

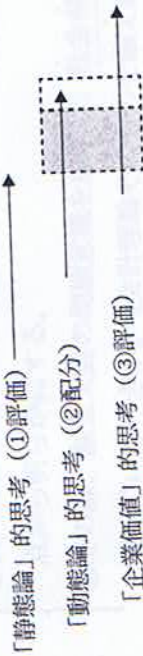
13

図表2 2つの枠組(系)の対照比較—伝統と現代の型—

特徴軸	①ストック/フローの関係	②計算の基点	③会計枠組の思考	④将来収支の確定性	⑤資産・負債の評価	⑥簿価決定のあり方	⑦利益決定のあり方
系I (伝統型)	フロー志向 (フロー→ストック)	当初認識時	配分 (配分の修正)	確定的 (固定的)	原価・非連続・ストック評価型	連続・フロー配分型	フローの配分計算
系II (現代型)	ストック志向 (ストック→フロー)	特定時点	価値評価 (直接的再測定)	不確定 (変動的)	時価 (公正価値)	非連続・ストック評価型	ストックの価値評価差額

(石川[2008]103頁図表6-1より)

図表4 会計思考の変遷と交錯—変容の基礎—



(石川[2008]108頁図表6-3)

図表7-3 変容の構図—基礎・構造・形態—

- (iii) 変容の形態: ⑤個々の会計ルール全体のハイブリッド性
- (ii) 変容の構造: ④企業会計のハイブリッド構造(図表6-2, 図表7-1)
- (i) 変容の基礎: ①社会経済的基礎の変容 → ②会計に求められるものの変容 → ③異なる会計思考の併存と交錯 (図表6-3)

図表7-1 変容の構図—方法・対象・方向—

対象	方法	系I	系II
I) 実物(モノ)系 (実物経済)		(イ) → スター-J2	(ロ)
II) 金融(マネー)系 (金融・証券経済)		(ハ) → スター-J1	(ニ)

14

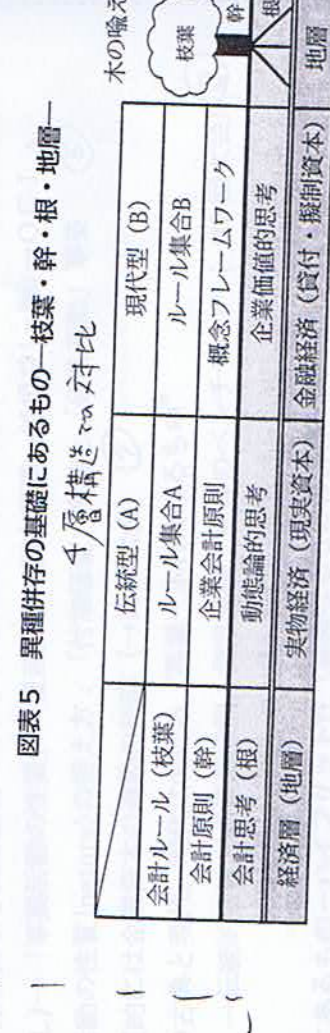
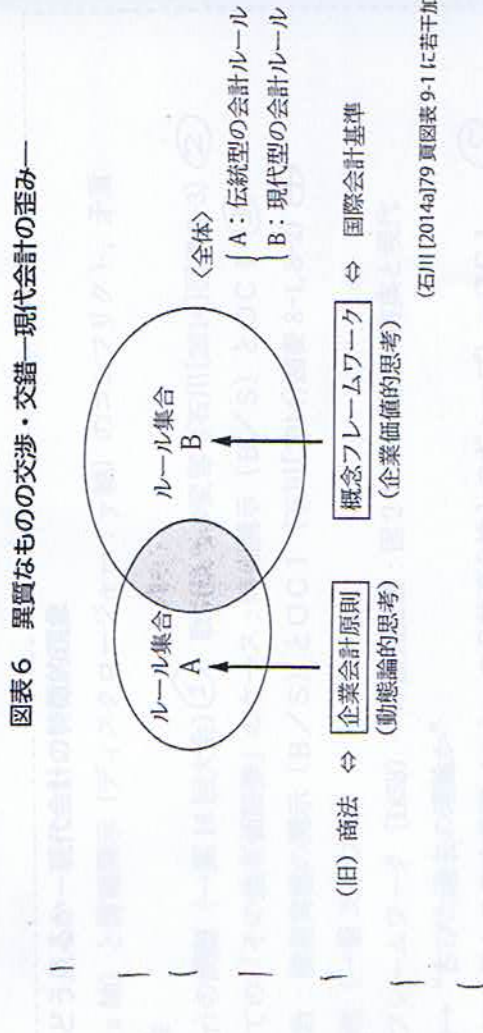
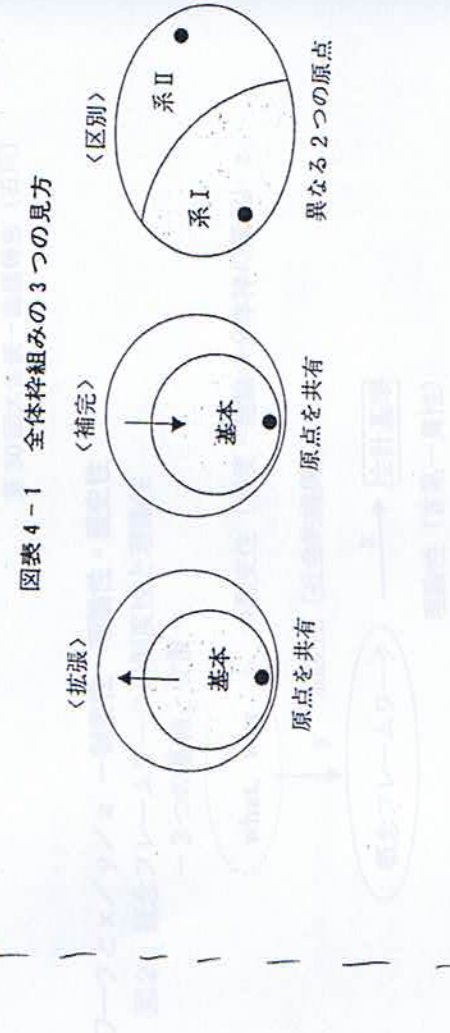
15

17

18

19

補注2 決算報告と投資情報の開示(ディスクロージャー)
 図表5-1-1において、1階での決算報告と2階での情報開示とを対比しているのは、既存株主への(報告) (単体決算書) (会社法) から証券市場(擬制資本信用)の発展にもなう投資家(潜在株主をふくむ)への情報の「開示」(投資情報の開示としての連結財務諸表、金商法)という現代会計の展開と変容を示すためである。決算報告といつても、決算開示といわないように、それぞれのベースにある法の相違に注意されたい。端的に、決算報告会計(会社法)と情報開示(ディスクロージャー)会計(金商法)との相違である。
 重要なことは、擬制資本信用の一層の展開とそれを媒介にした株式会社の現代的あり方、そしてそれを受けた企業会計の現代的あり方、といった基礎論的・総体的分析が現代会計の変容を読み解く鍵になるといふことである。この点は、あとのVの15「社会科学としての現代会計論」で論じる。



図表6-1 2つの会計の基礎とあり方の対比
 (i) 2階の会計(会社=モノ)……投資家本位(投資判断)会計: ①環境的不確実性、②「人対自然」関係、③予測と情報、④不確実性と「情報」⇒「意思決定」情報としての会計
 (ii) 1階の会計(会社=ヒト)……利害調整(信託義務)会計: ④通信的不確実性、⑤「人対人」関係、⑥逆選抜、モラル・ハザード、⑦不確実性と「制度」⇒「利害調整」制度としての会計

図表11-1 「資本」の動態変化と現代会計
 ①「資本」: 高利貸資本、前期的商人資本 → 近代的商業資本 → 産業資本 → 貸付(利子生み)資本、擬制資本
 ②「利潤」: 商人資本の利潤 → 商業利潤 → 産業利潤 → 利子、利回り
 ③「信用」: 商業信用(流通信用) → 資本信用、擬制資本信用
 ④「価格形成」: 費用価格 → 擬制資本価格

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34